

山形大学附属博物館史序説

小 幡 圭 祐

はじめに

山形大学附属博物館は、同館のウェブサイトによると「昭和初期、本学教育学部（2005年4月より地域教育文化学部）の前進である山形県師範学校に設置されていた「郷土室」を引き継ぎ発足したもので昭和27年4月「博物館相当施設」に指定され、「山形大学附属郷土博物館」として発足した。更に本学の発展に伴い、当館における学術資料の収集・蓄積は、学部・学科等の増設と相俟って逐年広域化するとともに、諸研究部門との連携も深まり、その性格は「郷土性」を越えるに至ったため、昭和53年5月から名称を「山形大学附属博物館」と改め今日に至っている」とその沿革を説明している。また、事業概要の一つとして「歴史・考古、民俗、美術、地学・地理、動物・植物、医学、工学、農学等に関する資料をひろく収集し、保管し、展示している」とさまざまな種類の資料をアーカイブする施設と位置づけられている¹⁾。本稿では、詳細が必ずしも明らかになっているとはいえないが、山形県師範学校の流れを汲むとされる山形大学附属博物館のルーツと、その所蔵資料の来歴について考察を加えるものである。

山形県師範学校・山形大学教育学部で教鞭をとり、山形大学附属博物館の初代館長を17年務めた長井政太郎は以下のように説明している²⁾。①1930年（昭和5）に長井が山形県師範学校の教諭を拝命した直後に郷土資料収集が開始された。②山形県女子師範学校では郷土室を建築し、研究資料が出版された。③山形県教育会が西村山郡の郷土博物館を前身とする郷土研究博物館を運営し、これに三浦新七が関与し収集した史料が陳列されていた。④教育会館の建物が海軍に徴用されることになると、郷土博物館は山形師範学校女子部の郷土室と合併し「博物館らしい形が出来上がった」。⑤大学になっても細々と運営が続けられた。

また、博物館相当施設指定40年の記念誌『山形大学附属博物館40年のことども』に当時の館長であった仲野浩が長井の回想を諸史料から再検討し、以下のように長井が指摘した①～④のさらなる事実を補足・訂正した³⁾。①山形県師範学校には郷土研究のための郷土室が設置されていた。②山形女子師範学校には以前から陳列室があり、1932年（昭和7）に郷土室の増新築工事が行われたものの、1944年（昭和19）の火災で焼失した。③1924年に開館した西村山郡教育会郷土博物館は、1927年に山形県教育会の教育会館に移転し、そこに史料も移管された。さらに、郷土博物館に置かれた山形県郷土研究会が活動を開始した。④1944年に教育会館にあった郷土博物館は山形師範学校男子部郷土室に移転され、女子部郷土室の機能も吸収した。そこに、「郷土博物館の資料の大部分（但し生物関係の資料を除くもので、西村山郡教育会の郷土博物館より移管した資料の全部と三浦新七氏等収集の古文書等であろう）」が移管された。

長井・仲野に共通する点として、現在山形大学附属博物館の所蔵資料の中核となっている、山形市出身の実業家・歴史家である三浦新七（1877～1947）の収集資料が山形県教育会の郷土博物館に所蔵されたのち、山形師範学校の郷土室を経て現状に至ったと認識されている。この理解で行けば、三浦の運営に関与していた山形県教育会の郷土博物館が、現在の博物館の性格規定に重要な影響を与えたことが指摘できそうである。

よって、本稿では更なる史料の分析を通じて①～④の博物館の歴史を再考し、山形大学附属博

博物館が設立されるに至った背景、そしてそこに蓄積された「地域アーカイブ」⁴⁾の形成過程について可能な限り迫ることとしたい。

1. 山形県師範学校の郷土室

(1) 郷土室の前身

『山形大学年報 第2号』によると、山形大学附属博物館のそもその前身は、山形県師範学校寄宿舎に設置されていた博品室であるという⁵⁾。博品室(図1)とは、1916年(大正5)7月改定の寄宿舎規程によると、「自然物及ヒ工芸品ニ関スル趣味ヲ喚起シ且ツ常識ヲ養フ」ことを目的として設置されたものである。室の陳列品は「職員生徒ノ寄附採集若クハ校外有志者ノ寄附ニ依ル」とされ、春・夏・秋の休日や放課後には有志が自然物採集・標本製作を行った⁶⁾。

しかし、その後の来歴を考える上で博品室と同時に注目すべきは、同じく山形県師範学校に設けられた教育参考室という設備である。1916年1月制定の教育参考室規程によると、「大正四年今上天皇陛下御即位ノ大礼ヲ記念スル為メ本校ニ教育参考室ヲ設ク」と、1915年(大正4)の大正天皇の即位を記念して設置されたもので、本室においては「本県ノ地方的資料」を主として教育・産業・歴史・地理・博物の五部門の物品(参考品)を蒐集するものとした。参考品の収集は一部は校費、それ以外は寄附によるものとされ、寄附は職員・生徒から募集された⁷⁾。『山形県師範学校一覽』に掲載されている平面図(図2)から

は、「参考室」=教育参考室が山形県師範学校本校の階上に存在していたことが知られる。

この二室の活動の成果として収集されたものが「郷土資料」であった。1915年6月制定の夏季休暇中作業内規⁸⁾によると、夏季休暇中には生徒には休假日誌と科外読書が課されるほか、各学年に課題が出されることとなっており、このうち第一学年は「植物標本採集五十種以上」、第二学年は「月山採集植物整理」、第三学年は「郷土資料」、第四学年は「郷土資料又ハ小学校参観」、第二部第一学年は「蔵王採集植物整理」、第二学年は「小学校参観」、講習科第一学年は「植物標本採集五十種以上」、第二学年は「蔵王採集植物整理」が課されている。「郷土資料」とは、「市町村ノ地理、歴史、教育、産業、風俗、信仰及理科的現象等ヲ全般ニ涉リテ調査スルモ又ハ部分的ニ研究スルモ可ナリ」とされており、博品室・教育参考室はこの課題遂行にかかる施設であったと考えられる。



図1 山形県師範学校の博品室
(山形大学附属博物館制作「山形アーカイブ」001-003-00156)



図2 山形師範学校本校階上の平面図
(『山形県師範学校一覽』)

(2) 郷土室の誕生

『山形大学年報 第2号』は先の博品室の設備が1923年（大正12）の寄宿舎焼失によって失われたが、1929年（昭和4）に本校階上に郷土室が設置されたことに触れている⁹⁾。

山形県師範学校の郷土室について、同校が編纂した『郷土研究資料目録並解説』の説明によると、郷土研究については、国語・歴史・地理・博物・物理・農業・手工の各学科に限定し、各学科の教員が分担して調査・収集に当たるものとされ、そのために設置されたものであるとされている。郷土室は「各学科に於て職員及生徒の調査蒐集せる各種資料を整理陳列し自由に展覧せしむ」資料陳列室、「本校来賓室を兼用し図書古文書及郷土史に関する写真を陳列し、資料目録カード箱を備へ是等の閲覧及特別研究生の指導を行ふ」研究指導室、「地図描写、図表作製、模型作製、青写真複写等を行ふ」研究作業室からなり、室の利用と研究の統一を図るために職員中より主任を各学科1名ずつ、郷土室係を若干名置き、必要ある場合は生徒中より委員各若干名を置くとした¹⁰⁾。

郷土室の資料陳列室を撮影したと考えられる絵葉書（図3）には「山形県師範学校 御大典記念陳列室」とあり、従前の教育参考室が郷土室に充てられたものと考えられる。

郷土室の所蔵資料¹¹⁾については、資料陳列室は「本県の工業生産物・地理模型・風景又は風俗産業地形及び地質並に動植物等に関する写真類・生徒の研究物・生物標本・農産物標本・郷土研究に関する図書類等を陳列」し、研究指導室は「郷土史関係の図書写真類・出品類・郷土資料目録カード箱等」を備え、研究作業室は「分布図・図表・模型・グラフ類等の製作作業の指導並に成績品・参考品等の陳列」を行うとしている¹²⁾。郷土室は従前の博品室と教育参考室の機能を引き継いだものと考えられる。



図3 郷土室の資料陳列室
（山形大学附属博物館制作「山形アーカイブ」001-003-00165）

2. 山形県女子師範学校の郷土室

(1) 郷土室の設置

仲野の説明によれば、山形県女子師範学校においては、1916年（大正5）に初めて郷土講演会を開催し、清河正明・細井平洲の事蹟その他の講話を催し、関係遺品の展覧を行ったが、かねてより実施されていた最上義光祭とも関わる形で、毎年春・秋の2回講演会・展覧会を開催されるようになった。これらを背景として、1932年（昭和7）に山形県女子師範学校の郷土室増新築工事が行われたが、実のところこれ以前から陳列室が存在し、「郷土室」と呼ばれていたとされている¹³⁾。事実、『創立三十年史』によると、1932年6月17日「郷土室増築工事ヲ始ム」、7月30日「新築中ノ郷土室落成ニ付陳列品ヲ移転ス」とあり、郷土室の設立前より何らかの陳列がなされていたことがうかがえる¹⁴⁾。

1934年（昭和9）に刊行された『郷土研究並郷土教育』によると、山形県女子師範学校の郷土研究は、「郷土教育への前提として、郷土地域に於ける郷土社会の歴史的並経済的社会的な生活

を明確に認識する」ことを目的とするもので、国語・歴史・地理・農業・商工業・婦人生活の六科を置くものであった。そのような方針のもとに、「本校郷土室の施設経営に当りて、郷土社会に於ける実生活研究の室たらしめ、郷土研究並びに教育の重要な一中心機関たらしむる」必要があるとし、「それが単なる陳列室たらしめず、生徒をして見物人たるに止まらしめず、今日の作業主義、体験主義の教育に基づく教師、生徒の協働により郷土調査資料の蒐集を、製作を、更に彼等の手により整理され陳列された郷土室を、即ち教師の指導による彼等中心の作業場、研究室たらしむるもの」で、生徒が「郷土室の資料蒐集者、建設者、経営者」として「此れが完成に到らしむる過程に参加さす事に重要な教育的意義」があると位置づけられている¹⁵⁾。

山形県女子師範学校の郷土室には、「郷土調査資料の蒐集、作製、研究の各部」として「国語科関係の部」「歴史科関係の部」「地理科関係の部」「農業科関係の部」「商工業科関係の部」「婦人生活科関係の部」の6部が置かれた。また、係員として「郷土室施設経営の大局的見地よりする指導」を担う主任、「調査資料蒐集研究並びに作製、生徒研究の指導に当る」係職員、「若干名、主任、係職員を補はしむ」生徒係員を置くとしている¹⁶⁾。郷土室には「文献、記録、統計、地図、写真、模型、標本類を収めたる陳列棚、陳列台等を配置す」とされ、「製図台、大卓子、椅子等を設備し実習研究の用に充つ」るものとした。また資料の蒐集については「職員生徒の研究調査、有志の寄贈、購入等の方法」によるとされている¹⁷⁾。

山形県女子師範学校の郷土研究の成果は、その名も『郷土研究』という冊子で刊行された。その内容は、おおよそその論考のタイトルよりうかがい知ることができる。

『郷土研究〔第一輯〕』¹⁸⁾ = 土谷彦一郎「俳人常世田長翠」／鈴木武男「郷土史概要」／齋藤義三郎「山村住民と植物の名称」／同「面白山とはどんな山か」／同「五所山の盛時を語るザンザリ瀑を探る」／小野寺稔「笹野彫に就て」

『郷土研究〔第二輯〕』¹⁹⁾ = 鈴木武男「郷土史概要」／農業部「本県の蔬菜栽培の概要」／篠崎高之助・栗林剛「天童将棋駒」／家事科研究部「郷土の食物調査研究」／裁縫科研究部「裁縫科に於ける郷土調査」

『郷土研究〔第三輯〕』²⁰⁾ = 阿部次郎「郷土史料として観たる東遊雑記」／高師広吉「米沢藩に於ける細井平洲の教化について」／石塚栄子「一具庵一具」／鈴木武男「郷土史概要(三)」／難波小枝子・鈴木睦子「庄内藩転封事件」／山水みつ「置賜地方の古墳に就いて」／地理科研究部(寺島天海「山形県の製糸工業に就いて」／田代なほ・鳥貫昌子・相田キミエ・竹田ハル「米沢織に就いて」／紺野まし「米琉に就いて」／工藤美恵子・太田貞子「鶴岡市の織物研究」・岩田フサ・佐藤ちる子・西さた「山形市を中心とする綿織物業に就いて」／榎本房子・野沢良子「山形県に於ける温泉の分布」／高橋八千代「長崎町に於ける交通的変遷」／本多鶴美「鳥海山に就いて」)／農業部「本県の蔬菜栽培の概況(続篇)」／遠山啓二「山形県下の淡水魚類」

(2) 郷土室の所蔵資料

山形県女子師範学校の郷土室は1932年に設立されたが、先に見たようにそれ以前から陳列室が存在し、また1931年(昭和6)の師範学校学則の改正にともなう山形県女子師範学校本科第一部・第二部の学科課程及毎週教授時数表には、第4・5学年の歴史の増課科目(選択科目)に「郷土史研究」があるように²¹⁾、すでに具体的な教育課程の中にも郷土研究が位置づけられていた。ゆえに、その所蔵資料自体は、郷土室の成立前に郷土研究の成果としてすでに蓄積していたとみ

られ、同年に「郷土調査資料」の目録がまとめられている²²⁾。6つの科ごとに目録がまとめられているが、例えば歴史科であれば「郷土社会ノ文化ヲ発展的ナル生成ノ相ニ於テ認識体験セントス」「郷土史上ノ具体的事実ヲ以テ一般史研究会ニ資ス」との趣意が掲げられ、収集の対象は「文書、記録、系図、典籍、図書」などの「文献」、「歴史ノ参考トナルベキ由緒アル品物、及ビ旧時ノ遺物又ハ遺構ノ存スルモノ、及ビ伝説ヲ有スルモノニシテ考証ノ史料タルベキモノ」である「遺品、遺蹟」、「勤王家、志士、政治家、各藩主、功臣、学者、教育家、宗教家、篤行家、社会事業家、芸術家、孝子節婦等ノ伝記、逸話、遺書、遺墨、遺品、肖像画、碑文等」など「人物」にまつわるもののほか、「其ノ他」として「郷土ノ社会ニ伝承セラレタル制度、慣習、思想、祭祀、信仰及農民運動等」にも及んでいる。具体的な収集物は文献316冊のほか、「県下各小学校調査依頼事項」として「地方資料蒐集ノコト」「名勝史蹟、人物、口碑伝説調査ノコト」「遺品、遺蹟、標本類ノ調査ノコト」「各地方ノ文化的方面調査ノコト」などについての回答が挙げられている。

また、『郷土研究』に掲載されている裁縫科研究部「裁縫科に於ける郷土調査」では、「本校裁縫科の郷土教材」「本校設備の本県郷土衣服標本」など郷土研究の過程で作成・収集された作品・標本が郷土室所蔵になっていたことがわかる²³⁾。

3. 山形県教育会の郷土博物館

(1) 郷土博物館と山形県郷土研究会の設立

仲野によると、1922年（大正11）に西村山郡教育会が山形県教育会総集會にて、学制頒布50周年記念事業として教育会館建設を提案、1926年（大正15）12月19日の山形県教育会臨時總會にて、教育会館設置と教育会の財団法人化が決定した。西村山郡教育会では1924年（大正13）5月3日に、すでに山形県郷土博物館を設置しており、これを新設の教育会館に移管する運びとなった。1927年（昭和2）9月23日に鉄筋コンクリート造4階の教育会館（図4）が完成し、10月30日に落成式が執り行なわれた。郷土博物館は2階に設立されている²⁴⁾。

郷土博物館とほぼ同時に設立されたのが、山形県郷土研究会である。東北帝国大学法文学部内奥羽史料調査部の手になる『東北文化研究』によると、「同会は郷土に関する一般事項を研究する目的を以て、昭和二年十二月三日組織。会長には三浦新七博士を推薦し、すでに郷土に関する錦絵展覧会、手向百穴発掘等を行ひ、又国分寺問題、切支丹の遺跡、地名研究等、部門を分ちて研究調査に従事してをられる。目下会員約百名、去る八月十九日には鶴岡で、又廿日には酒田で講演会を開催し、三浦会長以下、師範学校長和田兼三郎、県史蹟調査委員五十嵐晴峯、同阿部正巳諸氏の講演があつたが、時たまたま喜田博士が来県せられ、本会の為に東北文化の進展につき講演せられた事であつた」と1927年12月3日に山形県郷土研究会が発足したこと、三浦新七が会長に推薦されたことなどが説明されている²⁵⁾。

山形県郷土研究会の設立の目的については、1927年12月3日制定の山形県郷土研究会会則によると、「本会ハ主トシテ山形県郷土ニ関スル一般事項ヲ研究スルヲ以テ目的トス」（第2条）と



図4 教育会館
(山形大学附属博物館所蔵
『山形県教育展覧会記念写真帳』)

されている。また、「本会ノ事務所ヲ教育会館郷土博物館内ニ置ク（便宜上事務ハ三浦銀行内三浦良之助宛）」（第3条）と山形県教育会館に設置された郷土博物館に事務局が置かれた。1935年段階の役員については、会長は三浦新七、幹事は安齋徹（山形高等学校）・五十嵐清蔵（東村山郡金井村）²⁶・橋本賢助（山形県師範学校）・三浦良之助（三浦銀行）であった。また会員は87名で、うち学校関係者は山形高等学校8名・山形県師範学校4名・山形女子師範学校1名・同附属小学校1名となっており、山形県師範学校には長井政太郎が含まれている²⁷。

長井が「三浦新七博士、師範学校囑託の五十嵐晴峰先生、安齋徹山形高等学校教授、橋本賢助山形師範学校教諭等がその運営に当って居られた」²⁸と説明するように、山形県教育会郷土博物館は山形県郷土研究会の役員の手によって運営されていたのであった。

（2）郷土博物館の収集資料

仲野によると、郷土博物館に西村山郡教育会から移管されたものとして、海産・淡水・陸産下等動物標本64点、淡水・海産貝類標本5点、化石標本46点、昆虫標本16箱、哺乳類1点、石器・土器類322点、鳥類標本304点、淡水及び海産魚類標本51点、蛇類・蛙類・トカゲ類・両生類27点が挙げられており²⁹、所蔵資料の中心が土器・石器類と生物標本であったことが知られる。また、郷土博物館においては、県民の教化や調査研究の便に供するために、教育参考品を収集し展示する機能もあったことも指摘されている³⁰。



図5 山形県教育会の郷土博物館
（山形大学附属博物館所蔵『山形県教育展覧会記念写真帳』）

実際に、1927年の山形市主催全国産業博覧会の開催に合わせて教育会館で行われた山形県教育展覧会には、相良人形「宮城山」「犬」などが出陳され（図5）、現在の山形大学附属博物館にも伝来している³¹。

4. 各組織の相互関係

（1）山形県師範学校郷土室と郷土博物館

最後にそれぞれの関係について確認しておきたい。まず、山形県師範学校郷土室と郷土博物館の関係について検討しよう。山形県師範学校歴史科の美濃部道義が執筆した『山形県史話』には、執筆にあたり「本県郷土史研究の権威五十嵐晴峰先生、渡邊徳太郎先生から色々の御教示を賜はり、また山形県郷土研究会にはその頒布する写真を利用させて頂きました」と、山形県郷土研究会に所属していた五十嵐・渡邊の支援と、山形県郷土研究会から写真の提供があったことが記されている³²。郷土博物館は山形県郷土研究会により運営されていたから、両者は統合前から山形県郷土研究会を通じて協力関係があったと考えられる。

その一方で、両者の所蔵資料の関係についても特徴がみられる。『郷土研究資料目録並解説』によると、山形県師範学校郷土室の所蔵物は、「図書之部」として国語・歴史・地理・博物・農業の各科関係図書と目録類、「器械標本之部」として博物標本（本県産の動物・植物・鉱物³³）・

農業標本（農業科）・工業標本・器械器具類、「図表及模型類之部」（歴史³⁴）・地理・農業科関係分）、「写真之部」（歴史³⁵）・地理・博物・農業・工業科関係分）であった³⁶。郷土博物館の所蔵資料との関係については、「山形市には郷土資料の頗る豊富なる山形県教育会郷土博物館すでに設立せられたるを以て、学校郷土室には直接教授上に利用せらるゝ物を主として蒐集陳列し、前者との重複を避けたり」と、意識的に棲み分けがなされていたことがわかる。ちなみに、「尚学校には三浦新七博士の多年蒐集したる本県に関係ある農政資料・古文書・古図類等数千部を借用保管して、職員生徒の研究に利用す」と、従来郷土博物館に所蔵されてきたとされる三浦の蒐集した古文書は、郷土博物館ではなく師範学校に寄託されていたものであることが知られる³⁷。

（2）山形県女子師範学校郷土室と郷土博物館

如上の性格は、山形県女子師範学校郷土室と郷土博物館の関係にも当てはまる。『郷土研究並郷土教育』によると、「学校に於ける郷土教育の機関たる本校郷土室は、単独に存在する地方博物館とはその職能に於て些か異なる点」があるとし、それは「各学科の教科課程の実施に伴ひ、教授の進行につれ、郷土室を生徒学習の活動舞台とし、その全機能を發揮せしめるもの」であると位置付けられている³⁸。

郷土室と博物館の差別化が図られている一方で、「学校教育と社会教育との提携」も重視されている。「日本現下の教育制度より見て最も必要と考ふれば、本校所在地方の各種学芸団体、産業団体、婦人会、男女青年団殊に女子の学校にして、卒業後は漸てそれ等団体の指導者となる婦人会、女子青年団とは密接な連絡をとり、郷土室を彼等のために開放し、研究の便宜を与ふると共に家事、裁縫の蒐集品、研究物に関する展覧会、講演会を開催し、地方家庭生活の改善に資せん」と、各団体との協力が必要とされている³⁹。また、「他地方の博物館と連絡を計り目録の交換、蒐集品の相互融通、研究物の交換等をなす」と博物館との協力も行われていた⁴⁰。

（3）山形県師範学校郷土室と山形県女子師範学校郷土室

最後に山形県師範学校と山形県女子師範学校の郷土室の関係についてである。山形県女子師範学校が編纂した『郷土研究』に掲載のある遠山啓二「山形県下の淡水魚類」には、「男師橋本先生は県内魚類を多年に亘り調査せられてゐる。其の結果を近く山形県教育誌上に御発表の由、最近伺った。貴重なる結果を参考出来なかつたのは遺憾であるが、従来色々と御親切なる助言、指導を賜った⁴¹」と、山形県師範学校教諭の橋本賢助の協力があつたと記されている。また、同じく榎本房子・野沢良子「山形県に於ける温泉の分布」を見ると、論文に利用した写真に「五色温泉（安齋教授に依る）」⁴²とのキャプションが記されており、山形高等学校の安齋徹が写真を提供したことが知られる。橋本も安齋も山形県郷土研究会の役員で会員であつたのは前述した通りであり、山形県郷土研究会を通じた協力関係がうかがい知れる。

また、山形県師範学校と山形県女子師範学校は、1943年（昭和18）に山形師範学校に統合されたが、同年4月1日施行の山形師範学校物品会計規程細則⁴³のうち「第四条ノ物品監守区域及消耗品取扱範囲」を見ると、男子部国民科教室の物品監守区域として「歴史標本室、郷土室」とあり、また女子部国民科教室の区域として「郷土室」が存在しており、山形師範学校が創設された両室が合併した様子は見られない。両郷土室の所蔵資料も棲み分けがなされていたことがわかる。

すなわち、1944年（昭和19）の山形県師範学校郷土室と山形県女子師範学校郷土室、山形県教育会の郷土博物館の統合は、郷土博物館の移転と山形師範学校女子部（旧女子師範学校）郷土室の火災という偶発的に契機によるものであったが、その前提として3者をつないだ山形県郷土研究会の存在と、それぞれの所蔵物の棲み分けが存在したことが指摘できよう。

おわりに

本論の考察で明らかになった点を、はじめにで示した①～④に即して整理しよう。まず、①についてであるが、山形県師範学校においては、郷土室の設立前に寄宿舎に博品室が存在していたが、校舎に置かれていた教育参考室もルーツとして指摘できる。博品室では自然物・標本類、教育参考室には教育・産業・歴史・地理・博物に関する参考品を収集していたことが知られ、この二室の機能が寄宿舎の火災と郷土室の設立を機に集約されることとなった。また、山形県師範学校時代から三浦の蒐集していた古文書は郷土博物館ではなく山形県師範学校の郷土室に寄託されていた。次に、②の山形県女子師範学校の郷土室については、山形県師範学校郷土室と分野が重複するものも多かったが、婦人生活に関連する資料を郷土研究の結果などによって独自に収集していたことが知られる。③の山形県教育会の郷土博物館については、おもに土器・石器類と生物標本、教育参考品を収集していた。④の山形県師範学校郷土室・山形県女子師範学校郷土室・郷土博物館の統合については、契機自体は偶発的なものであったが、その前提として山形県郷土研究会を介した協力関係があったこと、所蔵資料の棲み分けがなされていたことが明らかとなった。

以上を総合すると、山形大学附属博物館が多様な分野の所蔵資料を収集するようになったのは、そのルーツである山形県師範学校郷土室・山形県女子師範学校郷土室・郷土博物館が、それぞれ資料の収集にあたって棲み分けを行っていたことが関係していると考えられる。そして、そのような三者が統合されたのは偶発的な事情であったが、その前提として三者をつなぐハブとして機能した山形県郷土研究会の存在が指摘できる。山形大学附属博物館の性格を語る上で、三者と山形県郷土研究会はいずれも必要不可欠な要素であると言えよう。

最後に今後の課題である。現在、山形大学附属博物館で所蔵しているものの中には、「裁縫雛形」や「生徒成績品」など来歴不明のものが複数確認されている⁴⁴⁾。今回、山形県女子師範学校郷土室の所蔵目録を見出したことで、その突合せが可能となった。また、山形県郷土研究会の活動には、会長をつとめた三浦新七の思想が色濃く影響していたことは、その弟子で初代山形大学附属博物館長の長井政太郎も指摘しているところである⁴⁵⁾。目録との突合せによる三者の所蔵資料の復元と、三浦の資料収集にかかる思想をあわせて考察することで、山形大学附属博物館のルーツと所蔵資料の性格をより浮き彫りにすることができるであろう。これらについては別の機会に考察することとしたい。

注

- 1) 山形大学附属博物館ウェブサイト (<http://museum.yamagata-u.ac.jp/gaiyou.html>)。2023年12月4日閲覧。
- 2) 長井政太郎「郷土博物館成立の思い出」(『山形大学附属郷土博物館報』2、1975年)。
- 3) 仲野浩「創設前史」、山形大学附属博物館編刊『山形大学附属博物館40年のことども』(1994年)。
- 4) 「地域アーカイブ」についての筆者の考えは、小幡圭祐・佐藤琴・堀井洋・小川歩美・大月希望「地域アー

- カイズ学」構築に向けての論点整理」(『情報知識学会誌』33-2、2023年)を参照。
- 5) 学報年報編集委員会編刊『山形大学年報第2号(昭和26年10月～昭和29年10月)』(1954年)。仲野浩「山形大学附属郷土博物館の誕生」(『山形大学附属博物館40年のことども』16頁)にも該当箇所が引用されている。
 - 6) 山形県師範学校編刊『山形県師範学校一覧』(1916年)179～200頁。
 - 7) 『山形県師範学校一覧』137～138頁。
 - 8) 『山形県師範学校一覧』173～174頁。
 - 9) 『山形大学年報第2号(昭和26年10月～昭和29年10月)』。
 - 10) 山形師範学校編刊『郷土研究資料目録並解説』(1933年)1～7頁。
 - 11) 資料の詳細は『郷土研究資料目録並解説』から知ることができる。
 - 12) 山形県師範学校編刊『山形県師範学校要覧:創立六十周年記念』(1938年)140頁。
 - 13) 『山形大学附属博物館40年のことども』5頁。
 - 14) 山形県女子師範学校・山形県立山形第一高等女学校編刊『創立三十年史』(1934年)58～59頁。
 - 15) 山形県女子師範学校編刊『郷土研究並郷土教育』(1934年)1頁。
 - 16) 『郷土研究並郷土教育』2頁。
 - 17) 『創立三十年史』190～192頁。
 - 18) 山形県女子師範学校編刊『郷土研究〔第一輯〕』(1935年)。
 - 19) 山形県女子師範学校編刊『郷土研究〔第二輯〕』(1936年)。
 - 20) 山形県女子師範学校編刊『郷土研究〔第三輯〕』(1938年)。
 - 21) 『創立三十年史』140～148頁。
 - 22) 山形県女子師範学校編刊『郷土調査資料(第一回報告)』(1931年)。翌年には山形県女子師範学校編刊『郷土調査資料(第二回報告)』(1932年)が刊行され、昨年から追加となった収集資料が掲げられている。
 - 23) 『郷土研究〔第二輯〕』。
 - 24) 以上、『山形大学附属博物館40年のことども』7～9頁。
 - 25) 東北帝国大学法文学部内奥羽史料調査部編『東北文化研究 第巻巻第弐号』(史誌出版社、1928年)102頁。
 - 26) 山形市の郷土史家で、号は晴峯。山形大学附属博物館に「五十嵐家文書」(五十嵐晴峯収集文書)が所蔵されている。山形大学附属郷土博物館編刊『古文書近世史料目録第九号』(1977年)。
 - 27) 「昭和拾年現在 山形県郷土研究会会則並ニ会員名簿」、「山形市五十嵐家文書」00-155(山形大学附属博物館所蔵)。
 - 28) 前掲長井「郷土博物館成立の思い出」。
 - 29) 『山形大学附属博物館40年のことども』10頁。
 - 30) 『山形大学附属博物館40年のことども』8頁。
 - 31) 押野美雪「特別展「山形大学附属博物館ものがたり 収蔵品が語る90年のエピソード」(『山形大学附属博物館館報』44、2018年)。
 - 32) 山形県師範学校編著『山形県史話』(六盟館、1933年)4頁。
 - 33) 西置賜郡小国本村十四ヶ森産の「そろばんだまいし」を含む(『郷土研究資料目録並解説』139頁)。
 - 34) この中に「明治十年山形市街全図」がある(『郷土研究資料目録並解説』242頁)。現在山形大学附属博物館に所蔵されているものについては、拙稿「山形県の県都を建設したのは三島通庸か?それとも薄井龍之か?」(『山形史学研究』49、2021年)で紹介したが、来歴については博物館に確認したところ詳細不明とのことであった。地図が長らく光にさらされたためか退色が激しいため、おそらく掛図として使用されていたものと考えられ、山形県師範学校郷土室で所蔵していたものである可能性があると思われる。
 - 35) 「聖母マリア像(山形市三浦新七氏所蔵)」の写真を含む(『郷土研究資料目録並解説』262頁)。
 - 36) 以上、『郷土研究資料目録並解説』を参照。
 - 37) 『山形県師範学校要覧:創立六十周年記念』140頁。
 - 38) 『郷土研究並郷土教育』2頁。
 - 39) 『郷土研究並郷土教育』2頁。
 - 40) 『郷土研究並郷土教育』3頁。
 - 41) 遠山啓二「山形県下の淡水魚類」(『郷土研究〔第三輯〕』)。

- 42) 榎本房子・野沢良子「山形県に於ける温泉の分布」(『郷土研究〔第三輯〕』)。
- 43) 山形師範学校編刊『山形師範学校一覽 昭和18年度』(1943年) 87～98頁。
- 44) 前掲押野「特別展「山形大学附属博物館ものがたり 収蔵品が語る90年のエピソード」。
- 45) 長井政太郎「三浦新七先生と郷土研究会」(『山形県地域史研究』3、1978年)。長井が影響を受けた三浦の思想については、佐藤琴「長井政太郎収集資料の意義と今後の活用について」(国立歴史民俗博物館編刊『「総合資料学の創成」事業奨励研究等成果報告書(平成28～30年度)』2020年)を参照。